

| | |
|--------------|---|
| Title | 「端末へのメッセージ」に対する希望 |
| Author(s) | 渡部, 陽一 |
| Citation | 大阪大学大型計算機センターニュース. 38 P.53-P.55 |
| Issue Date | 1980-08 |
| Text Version | publisher |
| URL | http://hdl.handle.net/11094/65453 |
| DOI | |
| rights | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

「端末へのメッセージ」に対する希望

大阪大学教養部 渡 部 陽 一

§ 1. は し が き

端末利用者にとって、センターからおくられて来るメッセージは、重要な情報の一つであるから出来る限り、豊富な内容をもつものであることが望ましい。また、これらメッセージはしばしば、会話を遮断して出力されるので、冗長であれば利用者にとってわずらわしいものであることも否めない。よって、これら相反する二つの要望をみたすためには、メッセージ文が簡にしてかつ要を得たものでなくてはならないことは言をまたない。処が、メッセージ文の意味がわかり難く、判読に苦しまされ、ために時間と精力を浪費するといった場面も残念乍ら屢々生じている。時には、苦勞して読んだメッセージの意味をとり違えまたは始めからその判読を諦めるなどのため、重要な情報を逸して了った経験のある利用者も多いのではないだろうか。

勿論、かくして生じた情報の欠落が、計算の上に重大なかけりを与えるといったきびしい場面は少ないであろう。したがって、今迄のところ、この種のクレームをセンターに申し入れることを控えておられる利用者も多いと思われる。しかし、メッセージという形の情報提供もまた、センターのサービスの一つである以上、可能な限り、判りやすいものをとの努力をも惜しまないで欲しい。

§ 2. メッセージの判りにくいわけ

判りにくいメッセージ文となる理由はいくつか考えられる。

第一には端末に打出される文字がカナ文字でなく英文字であるという点であろう。しかし、カナ文字を打出すことのできない端末も多いのだから、この点は、辛抱しなくてはなるまい。

第二にはメッセージ文が様式化されていないという点にある。こういった情報が簡潔であるためには「最も重要な語句を最初におく。」ということが必要である。端末より会話開始直後たとえば

```
** 09.526 ** TSS WILL SIGN OFF AT 19.000
```

なるメッセージ文がおくられてくる。この文は英文として正しいのだがやゝ冗長の嫌いがある。事実この種の文には助動詞WILL は必要でない。サービスの終了が19:00時であることを伝えるのが目的なのだからむしろ

```
** SERVICE : 09.526 - 19.000
```

とすればずっと簡潔となるであろう。このように文体にたいしてもある程度の工夫をなし、言葉の誤用、濫用を避けるようにしてほしいものである。

もともと英文字で文を書くのに ① 英語を用語とする。 ② 日本語を用語としローマ字で記する。

という二つの場合がある。雑読となる第三の理由としては、このこれら複数系統の用語の混用があげられよう。端末には

**YOSANGAKU CHECK OK ·· ZENJITSU ZANGAKU ¥10200
なるメッセージが前述のメッセージの一段前におくられてくる。これは悪文の好例であるが、おもいきって

**¥10200 ····AVAILABLE BUDGET ON 06/20/80

((06/20/80)はその日の日付である。)

とする方が簡にして要を得ている。和文にしる英文にしるその誤用は勿論よろしくない。既設のメッセージ文についてすべて一度洗いなおしてみてもはどうだろうか。

§ 3. ローマ字について

判読にくるしむメッセージのあらわれる第四の理由は和文でかゝれたローマ字の誤用にあると思われる。周知のように、現在我国で常用されているローマ字綴法には二つの系統がある。その一つはヘボン式、他は訓令式(文部省式)とよばれている。ヘボン式は1882年に米人宣教師 Hepburn によって考案され、1902年頃から羅馬字協会の努力によって国内に流布されたスタイルである。そのよりどころは、「英語の発音」であったといわれるが事実は必ずしもそうではない。このスタイルは我々には馴染みが深いのだが、綴字法則が複雑で例外が多く、ために誤用されがちなのが欠点とされている。後者は1940年頃文部省で制定され、戦後1954年「正統な綴字」として閣議において決定をみたものである。しかし、そののち、その流布に対する努力は払われた様子はなく、さらに不可解なことだが(ひょっとすると占領軍の置きみやげといえるのかもしれない。)日本国有鉄道も、また同じ政府機関である外務省も今日に至るまでこの方式を採用しないまま経過している。しかし、この綴字法は、日本語文法の規則に忠実でありその法則自身がすこぶる簡単であって、一旦覚えると間違いが少ないというのが長所とされている。

メッセージにあらわれるローマ字和文の読みづらさはこの2系統の綴字法の混用や、誤用にその第四の因があると思われる。センターより端末に送るメッセージをローマ字和文で記すならば、これらヘボン式、訓令式の混用をさけて、いずれか一本にまとめて欲しい。たゞハード上の制限のためヘボン式・訓令式をとわず一工夫必要などころがある。

ヘボン式ローマ字は複雑であるから、こゝでは一応訓令式ローマ字の綴字法を概括しておこう。

① 訓令式ローマ字に使用されるのは26文字中19文字である。

A B D E G H I K M N O P R S T U W Y Z

その他の文字は外来語にのみ入ってくる。

② 母音アイウエオは単一文字 A I U E O と綴られる。

③ 子音は二文字で綴られるのを原則とする。

カ行 KA, サ行 SA, タ行 TA, ナ行 NA, ハ行 HA, マ行 MA, ヤ行 YA,
ラ行 RA, ワ行 WA, ガ行 GA, ザ行 ZA, ダ行 DA, バ行 BA, パ行 PA
例 タチツテト TA, TI, TU, TE, TO

④ 促音 同じ子音を二つ重ねる。

例 切手 KITTE, 雑誌 ZASSI

⑤ 拗音 Yを挿入する。

例 茶店 TYAMISE, 神社 ZINZYA

⑥ 撥音 Nであらわす。例 ピンポン PIN-PON

⑦ ツァ行の綴はTSAであらわす。

⑧ 長音 [^]A(アー)のようにルーフをおくのが普通だがコンピュータではハード制限上不可能である。したがって、同じ母音を二つ重ねてはどうかと考えられる。

例 急行 KYUKO → KYUUKOO (または単にKYUKO)

⑨ YI, YE, WI, WU, WE, WO, DI, DU, TSU, TYI は実際上使用されない。

⑩ 分綴法 品詞毎に区切るのが原則である。

例 HINSI GOTO NI KUGIRU NO GA GENSOKU DE ARU.

但し、熟語ではたとえば

県営球場 KEN-EI [^]KYU[^]ZYO

のように、発音上の曖昧さをさける必要があることに注意。

ここでは訓令式の綴字法だけに限って挙げておいたがヘボン式とともに一長一短があることは言をまたない。先述したように要は、これら二方式の混用がよくないのである。

§ 4. 結 語

書き終えて振り返ってみると、何か、「訓令式ローマ綴字」のキャンペーンのようになったが、真意はそうではない。くり返し、くどいようだが、メッセージは分り易い方向にという、要望を述べているにすぎない。

今後の参考となれば幸である。